第３章

戦 後
の奈良の災害

3－1 吉野地震

昭和27（1952）年　7月18日

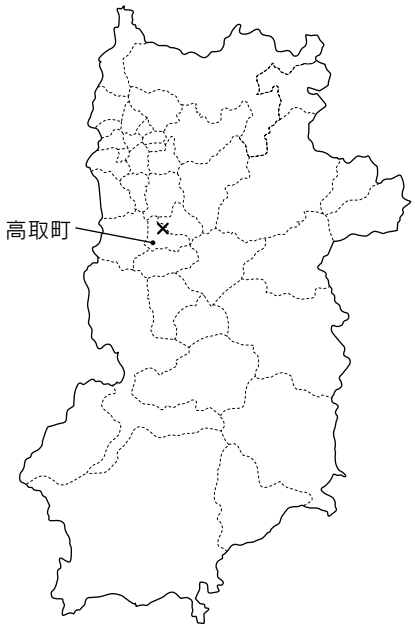
深夜の奈良を突然襲った、県内の地名がついた唯一の地震

夜もふけて人々が寝静まった午前１時、突如県内を強い地震が襲いました。県内では昭和１１年の河内大和地震以来となる激しい揺れで、驚いて窓から飛び出し死亡する事故が起きたり、ショックで亡くなられる方が出たりなどの被害が発生しました。

１．震源と規模

昭和27年７月18日の深夜、近畿地方を中心に最大震度４を観測する地震が発生しました。当初、震源は和歌山県の日高川上流、あるいは三重県櫛田川（くしたがわ）中流と推定されていましたが、しばらくして奈良県中部と訂正。「吉野地震」と命名されました。発震時刻は午前１時10分10秒（大阪管区気象台観測）で震源は北緯34度27分0秒、東経135度47分0秒の内陸部。地震の規模を示すマグニチュードは6.7で、震源の深さは60キロメートル。初期微動は大阪・神戸・京都・彦根で10秒のほか、名古屋が14秒、尾鷲が0.4秒で、震度４の範囲は徳島や浜松までに及びました。

震源の測定が遅れた原因は、震源が地下60キロメートルと深いところにあり有感半径が400キロ以上と広範囲にわたって強い揺れが観測されたことから、特定が困難であったことが挙げられます。



吉野地震の震源
（地図の市町村境は平成24年4月1日時点のもの）

２．被害のようす

昭和27年当時、奈良県の気象観測は橿原測候所（昭和17年に八木測候所より名称変更。昭和28年には奈良市の現所在地に移転）で行っていました。そこでは、震度４が記録され初期微動が7.4秒、継続時間15分。最初の揺れで地震計の針が振り切ってしまい、正確な振幅は測定できませんでした（大阪での観測は最大振幅38ミリ、和歌山で45ミリ）。体感的には「水平動が激しく体感時間も比較的長かった」（『奈良県気象災害史』）という状態でした。

■2－1　県内各所の被害状況

地震発生直後、橿原測候所は県内の学校・役場・土木事務所などの公共機関に対して地震の状況と被害程度の調査依頼を実施しています。ほぼ県全域が網羅されているので、それを以下で記載します。（一部、旧字・旧かな使い・漢字表記などを改めたほかは原文ママとしました）

北倭（きたやまと）中学校　生駒郡北倭村（現生駒市）では性質急な上下動を短時間感じた。村の被害は僅小で所々家の庭先の燈籠が倒れた程度である。地鳴はなかった。

月瀬（つきせ）中学校　添上郡月瀬村（現奈良市）では性質急な上下動とも水平動とも判らぬ地震動を相当長時間感じた。時計の振子が止まった程度で被害はなかった。

御所高校　御所町（現御所市）では急激な水平動を長時間感じた。地鳴があって大風の吹いたような感じであった。高校東南面の壁が少々剥離した。町内では土壁で亀裂の生じた箇所もある。石燈籠は大体南方へ倒れた。

高田土木事務所　大和高田市では急激な水平運動を短時間感じた。地震前にも地鳴があった。

多武嶺小学校　磯城郡多武嶺村（現桜井市）では急激な上下動を長時間にわたって感じた。大きい建築の家では時計の振子が止まった。談山神社の燈籠二基が倒れただけで他に被害はなかった。ただし不安定な器物は落下した。

三輪土木事務所　磯城郡三輪町（現桜井市）では急激な性質の水平動を長時間にわたって感じた。地鳴はあった。町内各庭の石燈籠は約七割倒壊した。人家で倒れたのはない。

東里（ひがしさと）中学校　山辺郡東里村（現宇陀市）では緩やかな水平動を長時間にわたって感じた。石燈籠はほとんど倒れ、柱時計の振子は止まった。壁に割目の出来た所もあり、小屋で倒れたのが一つあった。中学校の気象観測用の百葉箱内で自記温度計はひっくり返っていた。

波多野（はたの）中学校　山辺郡波多野村（現山添村）では極めて急激な上下動を非常に強く短時間感じた。地震前に地鳴があって、そのゆれ方は今までの地震と多少異なっているようであった。道路上所々に地割れを生じ土塀の瓦は落ちた。

都介野村（つげのむら）役場　山辺郡都介野村（現奈良市）では急激な水平動を長時間感じた。地鳴はあった。時計の振子が止まり花瓶が倒れた程度で大した被害はなかった。

大宇陀土木事務所　大宇陀町（現宇陀市）では急激な上下動を長時間感じ、発電所前に地鳴を聞いた。曽爾村では地辷り調査用の測定器が故障した。道路で被害箇所六を出張所管内で出し、その修理費三二五万円の損害であった。

榛原蚕業試験場　榛原町（現宇陀市）では緩やかな水平動を長時間感じ地鳴をきいた。内牧村の傾斜した畠に細い地割れを生じたが被害という程のものではなかった。

曽爾観測所　宇陀郡曽爾村では急激な上下及び水平動を短時間感じた。時計は止まったものもあった程度であった。別に地鳴は聞かなかった。石垣で崩れたものもあり、道路及び畑地の地表に軽度の亀裂を生じた。二十一日まで名張間のバスは運行を中止した。

大阿太中学校　宇智大阿太村（現大淀町）では急激な水平動を長時間感じた。地鳴はなかったが発震時に南東方に閃光を認めた。

五條観測所　五條町（現五條市）では急激な上下動及び水平動を短時間感じた。南北向きに振れる柱時計の振子は止まった。北宇智村（現五條市）では灰小屋一が倒壊した。

大淀高校　大淀町では地震動は急激であったが短時間しか感じなかった。高校講堂の壁一間巾のもの一枚が落ちた。理科室の棚の器具は落下して破損した。

池原中学校　吉野郡下北山村では緩やかな水平動を短時間感じた。地鳴も感ぜられず被害は皆無であった。

十津川村役場　十津川村では上下動を長時間感じ、発震前に地鳴を聞いた。家屋で被害を受けたものなく、道路は二、三箇所破損した。

五條土木出張所　五條観測所からは地鳴の有無の報告はなかったが、土木出張所では発震前に地鳴があったと報告している。家屋に被害はなかったが、道路で約二十箇所損壊を受けた。

大台ケ原山頂観測所　地震動は急激で長時間続いたが、柱時計の振子が止まった程度で被害はなかった。

寺垣内観測所　吉野郡下北山村では極めて急激な上下動を長時間にわたって感じた。地鳴は発震前にあった。被害は大したものなく道路上に小石が転げ落ちた程度であった。

県農業共済組合吉野支部　上市町では急激な上下動を長時間にわたって感じた。地鳴は発震前にあった。

前鬼観測所　吉野郡下北山村前鬼では急激な水平動を短時間感じ、田の石垣の石が数個抜け落ちた程度である。

荒神岳観測所　（野迫川村）急激な水平動を短時間感じ、地鳴はなかった。時計の振り子が止まった程度で大した被害はなかった。

玉置山観測所　十津川村玉置山では緩やかな水平動を長時間にわたって感じた。

川上観測所　体感時間は約三十秒の長時間にわたって感じた。急激な上下動の震動方向は北東であった。県道上に縦六米横四米程の大岩が崩れ落ち正午頃まで車馬の通行不能になった。山崩れ一箇所、石垣崩れ一箇所を生じた。

育英高校　奈良市では急激な上下及び水平動が長時間にわたって起った。地震の起る前南方に二回も発光現象があった。各家庭の不安定な花瓶置物等は倒れた。春日大社を始め市内各所の石燈籠は多く倒れた。

磯城郡初瀬町（個人よりの報告）　初瀬町（現桜井市）では石垣の石が計五、六箇転落した。西北西の山上で電光のようなものが二、三秒ぐらい閃くのを見た。柱時では東西にゆれるものは止まり南北にゆれるものは止まらなかった。

（『奈良県気象災害史』より）

深夜の眠りさました地震

死傷者八名にたっす

縣下の被害 電線も寸断

深夜の夢を破った今朝の地震は、奈良市はもちろん県下各町村に少なからぬ被害を与えた。国警県本部の集計による県下の被害つぎのとおり。（午前十時現在）

死者三名▽負傷者五名▽家屋納屋倒壊十九戸▽崖崩れ十二ヵ所▽石塔燈倒壊十四基▽県道路破損三ヵ所▽電線切断十五ヵ所▽電柱倒壊七本。

路傍で假寝の人々も

地震直後に暗黒の街を行く

縣下古社寺に被害

春日大社で燈ろう七百倒壊

二月堂でも十基

地震に八種類ある

震度四で器の水あふれる

旅館から飛降り即死

吉野で 大峯登山の青年が

櫻井でもショック死

上下動がこわい

逃げる時はフトンかぶって

地震の心得

一千貫の岩石落下

川上村 取り除きに一日

興福寺の土塀崩る

薬師寺三重塔被害

法隆寺は無事

奈良市の一部で自然断水

斑鳩町で一名重傷

郡山町で土塀崩る

赤膚焼のカマ壊る

燈ろうの下敷に

送電を停止

近畿教育研究会

総合文化調査報告書出版

指導連生駒郡連協役員決る

吉野川護岸工事へ

月瀬村交通途絶で村民悲鳴

五條署手製氷水

電燈ほとんど復旧

トルコブロも

「ノミ屋」取締り

写真説明（今朝写す）

一、倒れた二月堂の燈ろう。
二、寝巻き姿で戸外に飛び出した人々—奈良市内で—
三、春日大社の燈ろうも倒れる。
四、奈良市登大路町知事公舎の土べい崩れる。
五、奈良市東向北町で三千ボルトの高圧線路上にたれる。
六、土壁崩れる—生駒郡生駒町で—

お室も夏姿で カーテン・スダレ 衝立 籐イス 松井タンス店
1952年型の時計は 南口商会奈良支店
孫子の代まで使える ブラザーミシン直売店 上田ミシン店 曾我ミシン店 西沢ミシン店
中室金物店
エビスヤ帽子洋品店
丸忠
No.169461 パイロット萬年筆
原洋品店
明城 #1000香油 矢野商店
花浅本店
静かで親切な旅館 安楽
奈良競輪 7月 18 19 20 21 22 23 主催 奈良県
御寿司
蛍光灯で 吉川電気商会
御需要家の皆様へ 関西電力株式会社 奈良支店

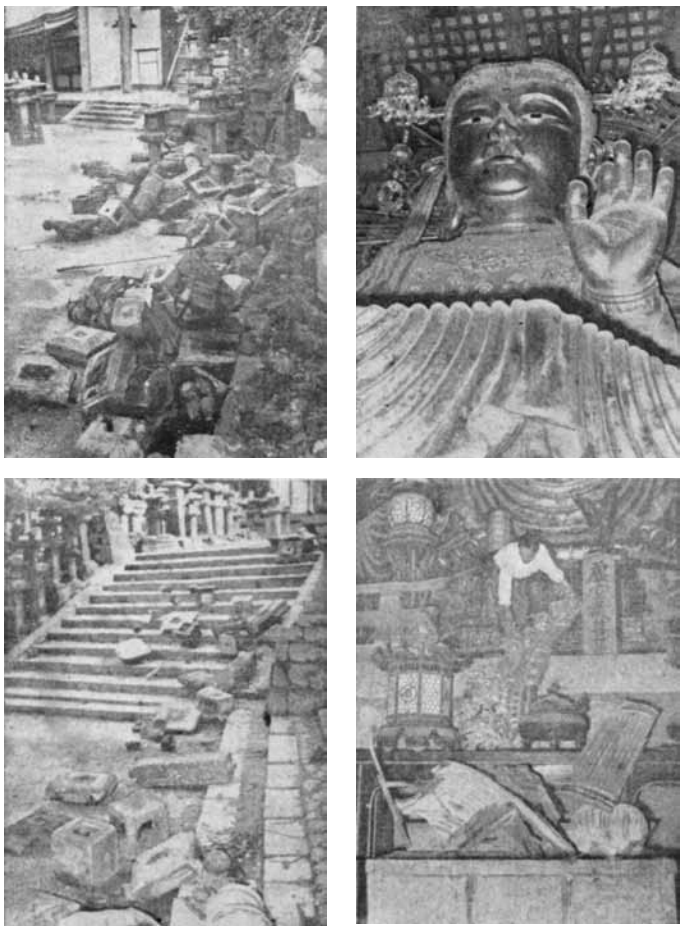
県内の被害を伝える紙面（『大和タイムス』7月19日付臨時夕刊2面）

国警県本部（国家地方警察奈良県本部）が集計した結果、死者３名、負傷者６名、家屋倒壊11戸、道路破損４か所、電線切断13か所、石灯籠倒壊709か所、電柱倒壊７か所、家屋大破19か所、板塀土塀倒壊12か所という被害規模でした。

この地震では県内の全地区で停電し、復旧には夕方くらいまでかかりました。奈良市内では６時間にわたった停電の影響で、配水管に水が供給されなくなり午前10時ごろから約１時間一部で自然断水を起こしました。

■２－２　文化財に対する被害

この地震により県内の文化財も被害を受けました。震源に近い吉野の金峯山寺（きんぷせんじ）の境内では、約40メートルの亀裂が２筋ほど入ったほか、百度石が倒壊したり敷地内の石柵の一部が破損した程度で、建物や仏像への被害はありませんでした。むしろ震源から少し離れた東大寺の方が被害は大きく、大仏の右側に安置されていた虚空蔵菩薩（こくぞうぼさつ）の宝冠が落ちたほか、大仏殿廻廊の壁２か所が落下し、同北側の石垣が一部破損しました。また、寺域内にある僧りょ宅の門の倒壊や本坊北側の土塀十数間、戒壇院の土塀約十間が倒壊。二月堂では石灯籠が20基倒れ、うち１基が全壊しました。しかし、近くの興福寺では本坊の土塀が倒壊し南円堂の石灯籠４基が倒れる程度で済みました。



文化財への被害
（『大和タイムス』7月19日付臨時夕刊より）

薬師寺では東院堂の本尊である国宝の銅造聖観音菩薩像が後ろに倒れたものの、厨子に支えられる形となり、かろうじて倒壊するのを免れ、講堂の薬師三尊の日光菩薩が激しい揺れで少し傾きました。

地震の激しさを推測する指針として、古くから春日大社の石灯籠が何基倒れたかが記録に残されていますが、吉野地震では648基が倒壊し、これは1,600余りある春日大社内の石灯籠数の３分の１に相当します。これについては『奈良県気象災害史』の著者である青木滋一氏が実地調査を行ったところ、過去の地震で倒壊した際の応急修理が重なっていたため、極めて不安定な状態にあったことが分かりました。石灯籠は春日大社に近づくに従い間隔が狭まっていて、それが将棋倒しのように倒れたため倒壊数が多くなったのでは

ないか、と推測され、「直ちに地震の規模やその被害程度のバロメーターとするわけにはゆかない」（『奈良県気象災害史』）と指摘されています。

2－3　人的被害

被害に遭われた方の詳細を見ると、深夜突然の揺れに襲われて驚き慌てたために発生したアクシデントであったことが分かります。あるいはこれが明るい時間帯に起きた地震なら、命を落とすこともなかったかもしれません。

7月18日（金）午前1時すぎ　磯城郡多村（現田原本町）
宮ノ森地区にある自宅の座敷から庭に飛び出そうとした女性（22歳）がショックで気絶。駆けつけた警官が救命に当たったが、死亡した。

吉野郡吉野町
大峰山登山のため友人8人と東南院に宿泊中に地震に遭遇。その中の男性（19歳）が慌てて同院東側の窓から、約20メートル下の畑に飛び降りたが、全身を強打して即死。一緒に飛び降りた友人1名が軽傷。

磯城郡大福村（現桜井市）
逃げようとして少女（9歳）が石灯籠の下敷きになり、間もなく死亡。一緒にいた母親（37歳）も左足を骨折する重傷を負った。

3．この災害の特徴

吉野地震は奈良の地名が名称に付く唯一の地震です。地震が少ないといわれる奈良県であっても、県内には巨大地震の震源となることが想定される断層は8つもあり、いつ何時、突然の揺れに襲われるかは誰にも分からない状況です。人的被害の項でも見たように、慌ててしまったことで遭わずに済んだ災難に遭遇してしまうということもあります。平常時に絶えず心がけておくことはなかなか難しいですが、機会があれば、もしものときにどのように行動すれば良いのかを考えておくべきことを被害事例が示しています。

3－2 紀和水害

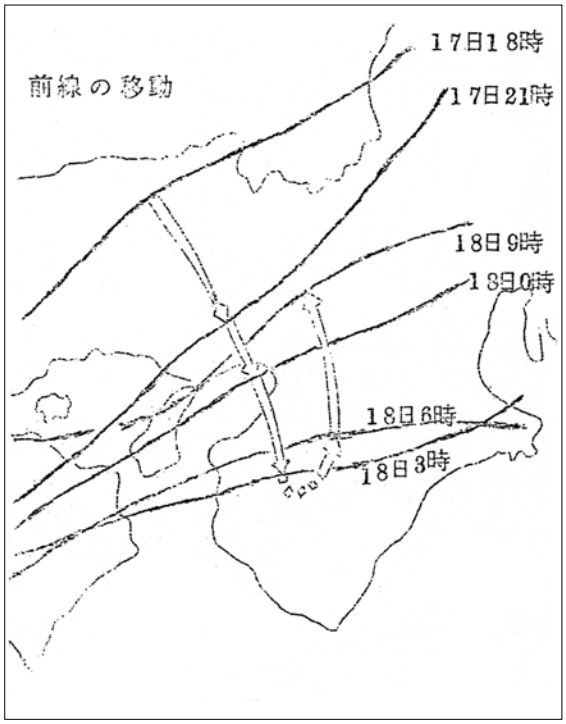
昭和28（1953）年　7月17日～20日

梅雨末期に降りしきった豪雨がもたらした大災害

紀伊半島に停滞していた梅雨前線が北から南へ、そして再び南から北へと移動し、そのとき雷を伴う局地的な豪雨を県内にもたらしました。特に大塔、野迫川、十津川の被害が著しく、死傷者、行方不明者合わせて70名以上を出す惨事を引き起こす結果となりました。

1．前線の移動状況

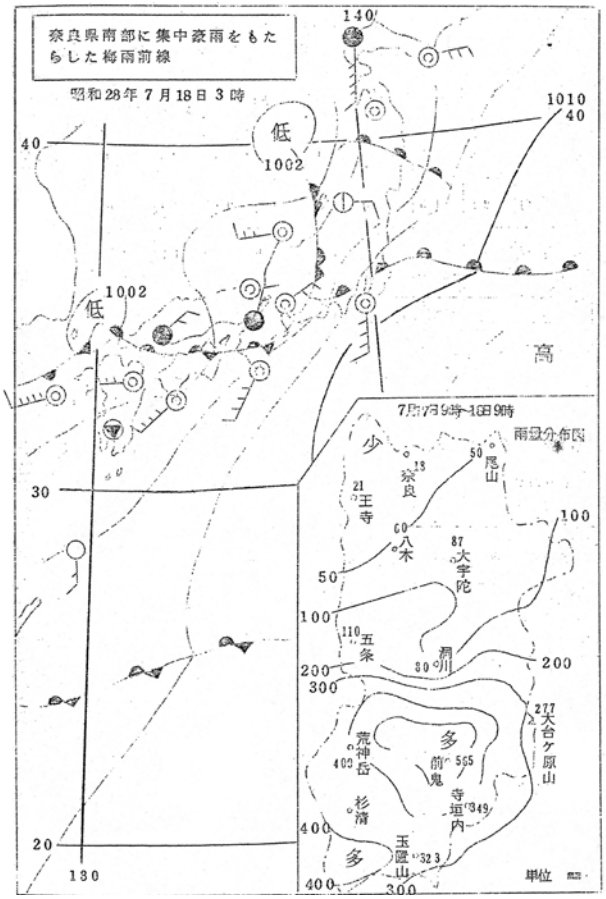
7月17日午後6時の時点では、日本海中部の低気圧から南に伸びた前線は能登半島付近から、近畿北部、瀬戸内海、九州北部を経て中国中部へと達していました。この前線がゆっくり南下していき、17日午後9時には小豆島と淡路島の中間から琵琶湖の北西側を結ぶ線辺りまで下がり、さらに18日午前3時には紀伊半島の奈良県南部と和歌山県北部とを結ぶ線あたりまで南下してきました。それが今度は北上を始め18日午前9時には淡路島の北東部をかすめる位置に達しました。前線はそのまま北上を続けたものの夜になると再び南下を始め、その後21日朝に日本海に抜けるまで、九州北部から四国を経て近畿北部に停滞し続けました。



前線の移動推移（『奈良県の気象災害（特に雨と風による災害について）』より）

2．県内の天候の推移

奈良県では17日夜から18日未明にかけて前線が南下する際に、吉野、熊野の山岳地帯に南西の気流が集中し、雷を伴う局地的な豪雨となりました。18日午前11時には大雨注意報が発表されましたが、午後４時30分に解除。しかし、同日夜から再び前線が南下し、県全域に再び雨を降らせました。17日の最高気温は29.4度で平年より0.5度低く、２、３日前よりも３、４度高い気温でした。18日も終日ぐずついた天候になり、19日午前１時に再び大雨注意報が出されるなど（同日午後４時30分解除）、すっきりしない天気がしばらく続きました。



7月17日午前9時～ 18日午前9時までの雨量分布図
（『奈良県の気象災害（特に雨と風による災害について）』より）

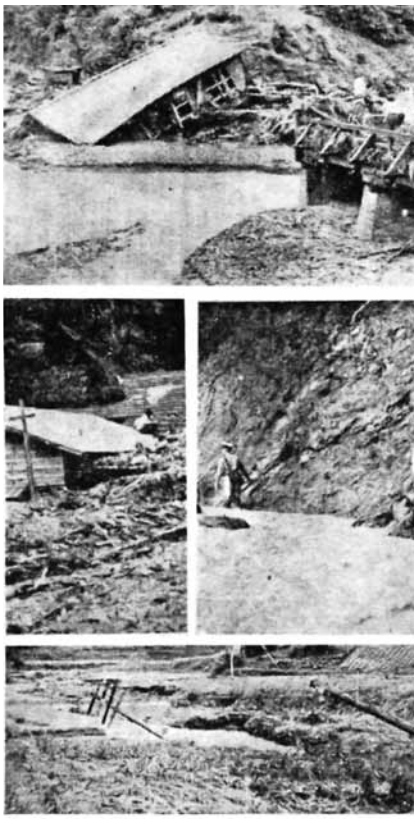
3．被害のようす

雨は７月17日午前９時から18日午前９時までの間に、県南西部は400ミリを超す雨に見舞われ、18日午後の時点では大和高田市の葛城川が増水して橋が流失や半壊し、付近の小中学校が臨時休校となりました。また高市地方では田畑約60町歩（約60ヘクタール）が冠水し、北葛城郡や宗檜村（現五條市西吉野町）では堤防決壊や河川はん濫の危険性があるなどの情報が寄せられていました。大きな被害としては、大淀町で河川はん濫で数十か所の土手が崩れ、山崩れで民家が１棟全壊、大塔村阪本では民家が土砂で埋まり３名が生き埋めになるという被害が発生しました。

流失した葛城川にかかる橋
（『大和タイムス』昭和28年7月19日付より）

そんな中、18日午後、十津川村から県知事あてに電文が入ります。その内容は「飛行機で救援物資頼む」というものでした。そのとき五條電話局管内の電話線は不通で、十津川村のほか、野迫川村、宗檜（むねひ）村（現五條市西吉野町）、天川村、大塔村（現五條市大塔町）と連絡が付かない状態でした。

野迫川村上垣内の状況を伝える紙面
（『大和タイムス』昭和28年7月23日付より）



水災後の宗檜村
（『大和タイムス』昭和28年7月22日付より）

■3－1　野迫川村の惨状

この水害で最も大きな被害を受けたのは野迫川村でした。前述の通り通信が途絶していたので、役場の使者が歩いて山を越え大塔村（現五條市大塔）阪本までたどり着き、鉱山電話で宇智吉野署に通報できたのは19日午後２時45分のことでした。野迫川では17日午後10時から翌朝午前６時まで土砂降りの雨が続き、各所で土砂崩れが発生。人口2,700名余り、世帯数553の村で、死者・行方不明者28名、200戸以上の家屋被害が出ました。

そのときの村内のようすは、「ヒザまでぼっする“ドロ沼”と化して、ここに住家があったとも考えられない荒れかただった。流出した家の人々は遠くへ、あるいは近くの近親者をたよりに引揚げており、完全に再起不能とみられる同地にはどこに行くあてもない人々が、残った三軒の家に難を避けていた。ドロ沼の中に北股中学のカワラだけが離れ島のように残っている。そのかたわらドロの中にピアノが半分ほど姿をみせているのが目を引いた。……」（『大和タイムス』昭和28年７月22日付「14死体、無残に放置　瓦しか残らぬ北股中学」）という状態で、収容された遺体は森林組合やバス運転手の詰め所に安置されたままになっていました。

同村では役場に水害対策本部を設け、全役場職員と消防団が協力して被害調査に当たりましたが、村長自身が自宅が流失するという被害に遭いながらの陣頭指揮となりました。

証言

昭和28年当時は、私は家業である箸作りを手伝っていました。野迫川は古くから高野豆腐を作っていましたが、時代的に材木が売れ出してきて、逆に高野豆腐の利益が上がらなくなってきつつあった時期だったと思います。野迫川からは大きな丸太を運び出せるような道がなかったため、箸作りをするようになったのだと思います。箸を削るのに電気モーターが普及しだしてきて、子どもでも作業ができるようになり、私も中学を卒業してすぐに家業を手伝っていました。

その日は、梅雨の末期で雨が１週間くらい降り続いていたのが、１日に700ミリとも1,000ミリとも言われるほどの大雨が降りました。７月17日のことだったか、18日のことだったか記憶が定かではありませんが、お昼ごろのことだったと思います。うちのヒノキ山が崩れていくのを父と小学校の校庭から見ていました。木が立ったままドサッと崩れ落ちてきて、岩と岩がこすれて煙が上がっていました。場所は北股の集落の上で、川底が土砂で上がってしまい、村の中央くらいまで砂が上がってきて集落の下半分が砂原のようになってしまいました。５戸が埋まり、６戸が流されました。お昼のことだったので幸い犠牲者は出ませんでした。

北股から少し離れた上垣外で中学校の上の家が崩れて相当の犠牲者が出たのは、少し後になって知ったと思います。危険だからということで、近くの大きな家に数家族が避難していたところに土砂崩れがあったため、あれだけ多くの犠牲者が出たみたいです。女の子が１人いまだに発見されていないのは本当にかわいそうです。

結局、野迫川村全体で数百か所の山崩れがあり、北股だけでも百数か所、私の家の山も10か所くらいが崩れました。主要な所は行政が工事してくれるのですが、それ以外の所は自分で費用を出して工事しました。川には石垣を積んで砂防し、崩れた所には横木を組んで、そこにハゲシバリやケヤマハンノキというやせ地でも根を張るような木を植えました。放置しておけば崩れたところから他の肥えた土が流れて山全体がやせ土になり、また崩れてしまうからです。

また、村民は箸作りと平行して田んぼや畑を作っていましたが、それも流されました。川に近い場所などは修復されましたが、奥の方の田んぼは再開されないまま捨てられたものもありました。ちょうど材木が売れるようになってきて賃金が高騰していた時期と重なったということもあったと思います。

大雨が去って普通の生活が始まりましたが、私自身はそう大変だったという記憶はありません。普段から自給自足の生活だったので何とか自分たちが食べる物は確保できました。電気は通っていましたが、通常でも停電が多く家にランプも常備されていました。火はガスがなくまきを使っていました。ただ、箸問屋が高野山にあり、でき上がった製品をそこまで運ぶのに道がほとんど崩れていて祖父や父はしばらく苦労したようです。

村外からの支援としては、大阪の南部から救援隊の人たちが来てくれて、家を１軒借りて２週間村に泊まり込み、家の泥出しなどを手伝ってくれました。車では村に入れないので、スコップを担いで高野山から熊野古道を歩いてきたそうです。そのうちの何人かは書店の店員さんをしていると言っていました。

北股地区の被害（写真提供：吉野武文さん）

災害をきっかけに何軒かは村を出て行きましたが、ほとんどの人は村にとどまりました。家を失った人は村営住宅に移り住みました。私の家は流されずに残りそこに住み続けましたが、平成23年の山崩れでついに避難区域に指定されてしまい、今は仮設住宅に住んでいます。昭和28年の水害を経験した当時も、町に出ても仕事の当てもなく何より先祖が残してくれた山を守らなければならなかったので、外に出ようという選択はありませんでした。山なら生きていくすべもある、という思いは今でもあります。　（野迫川村　当時17歳　男性）

■3－2　人的被害

他の被災地で特に被害が甚大だったのは、大塔村と十津川村、次いで天川村、宗檜村でした。被害の詳細は下記の通りとなりますが、ほかにも大淀町や川上村にも被害が出ました。

件名／村名	人的被害(名)			家屋被害(戸)					非住家被害(戸)	罹災者(人)
	死者	負傷者	行方不明	全壊	半壊	流失	床上浸水	床下浸水		
天川村	5	5	－	1	25	5	30	30	－	360
野迫川村	22	15	6	28	51	106	29	6	－	1,026
宋檜村	－	－	－	10	19	8	14	25	－	256
大塔村	3	7	－	6	9	9	－	－	5	419
十津川村	5	3	2	11	14	21	15	－	9	302
計	35	30	8	56	118	149	88	61	14	2,363

昭和28年7月17、18日の梅雨前線による奈良県（5か村）の被害（『奈良県の気象災害（特に雨と風による災害について）』より）

県災害対策本部が７月22日に発表した内容では、死亡者41名、行方不明70名、負傷270名などの数字も出ていて、最終的な確定数は、記録によりまちまちの状況です。

吉野郡野迫川村

７月18日（土）午前３時ごろ　上垣内地区

午前２時ごろ、最初の山崩れがあり、それが絶えず続く状態だった。午前２時半ごろには、森林組合、農協支所、自動車ガレージが押しつぶされ、３時ごろ、大音響とともに大崩れがあり、一瞬にして民家６戸をのみ込み21名が生き埋めになった。約１時間半のうちに８名が救出された。19日より発掘作業が始まったが、結局女児（10歳）１名が行方不明のままとなっている。

日時不明　池津川地区

濁流にのまれ一家３人（28歳の夫・27歳の妻・１歳の長女）が死亡した。

日時不明　上地区

野川中学３年の女生徒（15歳）が、家から家族とともに飛び出したが、兄弟の目の前で野川の濁流にのまれた。野川中学校１年の女生徒(11歳)も自宅が倒壊し圧死した。

日時不明　平地区

山仕事をしている夫婦が行方不明。他に土木会社の作業員２名も行方不明に。いずれも状況は伝わっていない。

野迫川村の被災現場近くに建立された慰霊碑

日時不明　北股地区

山崩れがあり山腹の山小屋にいた作業員８名のうち、６名が土砂とともに濁流にのみ込まれ行方不明となった。

日時不明　大股地区

吉野郡中荘村生まれの男性（年齢不詳）が行方不明。

吉野郡大塔村（現五條市大塔町）

７月18日（土）午前３時50分ごろ　阪本

山崩れで平屋建て木造家屋が倒壊。家屋の下敷きとなって夫(58歳)と妻(53歳)、それと長女（27歳）が生き埋めに。消防団総出で救出したが、午前６時40分ごろに３名の遺体が発見された。死因は圧死だった。

吉野郡天川村

７月18日（土）午前４時30分ごろ　塩谷（しおだに）

一家４名が暮らす住宅が天川に流出して、男性（35歳）とその妻（30歳）、長女（８歳）、長男（５歳）が行方不明に。母親が危険を感じて次男（４歳）を屋外に連れ出し、次の子どもを出そうと家に入った瞬間のことだった。

吉野郡十津川村

７月18日（土）午前５時40分　平谷（ひらだに）

平谷―折立間を航行するプロペラ船が豪雨のため待避作業中、機関が故障し航行が不能となった。平谷から約1,500メートル下流まで激流に流されたところで転覆し、乗組員３名（53歳男性・42歳男性・29歳男性）が流れにのまれて行方不明となった。

日時不明　葛川（くずかわ）

通学中だった神下（こうか）在住の女性（12歳）が山崩れで生き埋めになり死亡した。

ほか川上村、丹生（にう）村（現吉野郡下市町）でも犠牲者が出たという報道もありました。通信手段が全く使えなくなった上に、山仕事などで外部から入ってきた人も被害に遭っている、現在も正確には何名の犠牲が出たのか分からない状態です。実際に野迫川村上垣内に建てられた慰霊碑には、名字だけの女性や、氏名不詳の男性が犠牲者の１人として刻まれています。

■3－3　被災者への救援

流木に埋まった野迫川を進む救援隊員
（『大和タイムス』昭和28年7月22日付より）

19日午後４時に災害地の視察を終えて戻ってきた県知事と県の各部長が集まり協議した結果、県は同午後４時30分に野迫川村、大塔村、十津川村に災害救助法を適用しました。これは県としては当時初めてのことで、まず同午後５時に野迫川村に向けて医師と看護師からなる救護班14名を派遣。翌20日には、米軍飛行機の協力を得て食料、医薬品、ろうそくなどの救援物資を、野迫川村上垣内（かみがいと）、池津川ほか１か所、十津川村上野地（うえのじ）、風屋（かぜや）、折立（おりたち）、平谷（ひらだに）の４か所、大塔村（現五條市大塔町）阪本に送ることが決められました。

また、それとは別に内吉野地方事務所では野迫川村への第１段救援物資として、ろうそく2,000本、懐中電灯10個、蚊取り線香100箱を送りました。これは19日午後１時に鉱業所の索道が五條から大塔村阪本から開通したため実現しました。索道はその後、22日には野迫川村金屋淵（かなやふち）まで開通する見込みでした。

その他、プロペラ船を使っての救援物資の輸送も行われ、水・陸・空あらゆる手段を使っての支援が交通再開まで行われました。

４．この災害の特徴

県災害対策本部が調査してまとめたところでは、被害総額が77億円を上回ると試算され、その被害は南和地方に集中しました。野迫川や大塔、十津川の熊野川水系は地質が第三紀層に属し、粘りがなくボロボロ砕けるような土でできていると昔から言われていました。そこに梅雨の長雨に引き続き、７月17日から18日にかけて大塔村坂本（現五條市大塔町）で雨量540ミリ、十津川村長殿で561ミリ、荒神岳（野迫川村）で同400ミリという大量の雨が降ったため、ただでさえ緩い地質がさらに雨でぬかるみ崩れてしまったのではないかと思われます。日本有数の多雨地域と言われる大台ケ原では年間5,000ミリ以上の雨が降ることもありますが、その10分の１を超える量が１日のうちに降ったことになります。

3－3 台風第13号による水害

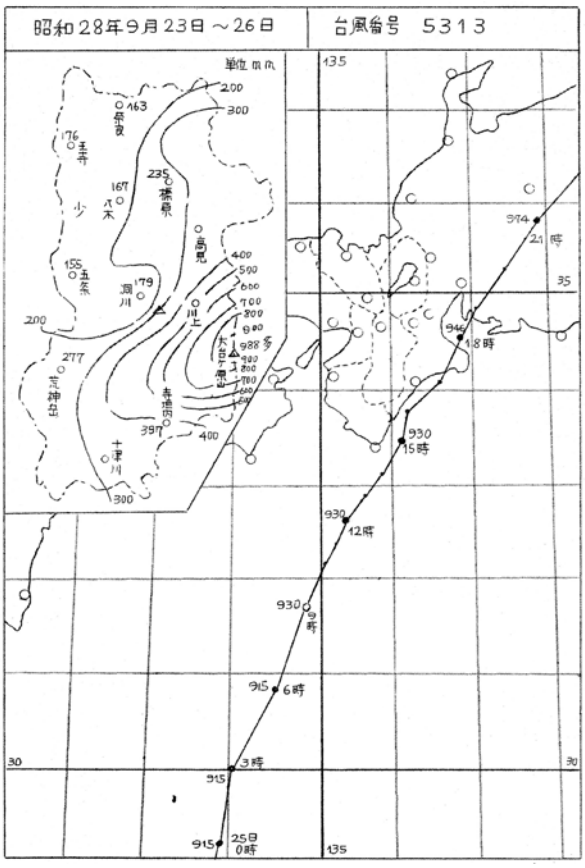
昭和28（1953）年　9月22日～25日

局所的な豪雨で
奈良市内の佐保川もはん濫

紀伊半島の南端をかすめるように通過し、伊勢湾から知多半島に上陸した台風第13号は、京都、大阪、滋賀などで洪水を発生させ、三重、愛知では高潮を引き起こすなど甚大な被害をもたらしました。県内でも多くの川がはん濫し、死者・行方不明者合わせて10名以上を出す災害となりました。

1．台風の進路

9月20日にグアム島の南東海上で発生、そこから北西進し、22日沖ノ鳥島の東方に到達した辺りで急に発達し始めました。非常に強い勢力を保ったまま向きを北に変え20キロメートル／時で進行し、24日の朝南大東島の東沖を通過して北上、25日午前3時には四国南方300キロメートルの海上を北北東に進行し、同日午前9時には室戸岬沖140キロメートルの海上で北東に進路を変更しました。潮岬付近の通過は25日午後3時前、午後5時には志摩半島を横断し、伊勢湾を経て午後6時30分ごろには愛知県知多半島に上陸。午後9時長野県諏訪市付近、日付が変わった26日に新潟市の東を通過し、午前6時には三陸沖にまで進みました。



台風の進路と県内降水量分布図
（『奈良県に大被害を与えた主要台風の解説』より）

2．県内の天候の推移

県では台風の進路より、室戸岬から大阪湾を通過する公算が大きいと考え、24日より台風第13号に対する警戒態勢に入りました。同日午前9時に奈良測候所より発表された「台風情報第一号」によると、中心気圧920ヘクトパスカルで南大東島東方150キロメートルを時速で北上しているということでした。雨は次第

に強まってくる様相を見せ始め、県南部で150ミリ以上の雨の降る恐れがあるとして、午後１時には「大雨注意報」を発表。日付が変わった25日午前０時30分には熊野川と吉野川に出水の恐れがあるとして「出水警報」が出されました。

三条通も浸水（写真提供：奈良新聞社）

台風は紀伊水道を通って大阪付近に上陸し奈良県も暴風雨圏内に入ると見られたことから、25日午前７時30分に「暴風雨警報」を発表。災害発生に対する注意が呼びかけられました。しかし、台風は進路を北東に変え紀伊半島の南端を通過しました。奈良県では午後４時すぎまで暴風雨に襲われました。規模としては必ずしも最大級の台風ではありませんでしたが、県内では局所的な豪雨に見舞われ、各所で河川の増水、はん濫が発生し、甚大な被害がもたらされました。

３．被害のようす

「25日正午過ぎに台風第13号が県に接近、あるいは通過する」。奈良測候所からのその情報で、県内の各学校は休校となり、７月の水害を経験した県民は「またか……」と肝を冷やしました。しかし、台風は予定より遅れて午後４時過ぎから５時ごろにかけて、吉野地方から奈良市周辺部に強風を吹かせました。台風の中心が奈良県を通過するのは昭和４（1929）年６月と昭和６（1931）年10月にもありましたが、いずれもさほど被害は出ませんでした。台風の勢力は大正元年に襲来したものに次いで２番目、雨量は「大台ケ原山の１時間最大雨量118粍（みり）あ

	人的被害(名)			家屋被害(戸)				その他の被害(個所)					
	死者	負傷者	行方不明	家屋全壊	同半壊	同流失	同浸水	田畑流失・埋没	同冠水	道路損壊	橋梁流失	堤防決壊	がけ崩れ
奈良市				12	6		2,565	52	532	84	26	34	22
大和高田市					13		79		116		1	4	
添上郡	4	8		11	50		864	206	737	520	116	132	71
山辺郡				14	29		760	34	311	319	61	34	21
生駒郡		17		15	28	1	1,473	424	646	254	30	86	229
磯城郡				8	66		1,233	337	3,297	302	18	89	63
宇陀郡	4	5		6	61	5	764	1,387	1,833	2,058	119	462	5,211
高市郡				11	53		1,066	193	977	369	28	50	139
北葛城郡	1			8	167		361	25	606	35	24	17	32
南葛城郡		3		7	11		117	7	408	31	5	106	55
宇智郡		25		73	189	3	1,488	18	60	25	5	2	10
吉野郡	1	2	3	40	347	83	1,427	267	905	907	243	107	588

台風第13号による地域別被害状況（『奈良県気象災害史』より）

り最大記録となる」（『奈良県に大被害を与えた主要台風の解説』）というものでした。

奈良佐保川、道路をのむ
写真は独流うつさき道路をのんだ佐保川（奈良市法蓮町、聖武御陵東側にて。家は県職安課長公舎）この濁流では付近の民家は軒なみに床下浸水。＝二十六日午前零時写す。

佐保川のはん濫で水没する道路
（『大和タイムス』昭和28年9月26日付より）

■3－1　佐保川のはん濫

奈良市では25日午後４時50分ごろに佐保町南町を中心に佐保川がはん濫しました。午後４時からの１時間の最大降水量は35.7ミリ。古くから「何があってもこの川だけは大丈夫」と言われていた佐保川がなぜはん濫したのかについては、上流に当たる山の木々がむやみに切られて、貯水能力が衰えたのが原因とする意見や、大雨量を流しきるにはその当時の佐保川が狭すぎたと思われること、川筋の至るところに流れをせき止めるような塵（ちり）の山が累積していたこと、戦中の食糧増産で河原や堤での耕作が水への耐久性を弱めてしまったこと、農業かんがい用井堰が可動式でなく固定式だったなど、さまざまな意見がありました。いずれにしても、地域住民が「絶対に大丈夫」と安心していた中でのはん濫で、家財を運び出す間もなくボートで２階の窓から避難する人もあったようです。

その後、増水はとどまることがなく「法蓮町（ほうれんちょう）、中御門（なかみかど）、東包永（ひがしかねなが）、西包永（にしかねなが）、東笹鉾（ひがしささほこ）、西笹鉾（にしささほこ）などの民家約二千五百戸が床上浸水、その他菩提町（ぼだいちょう）から餅飯殿町（もちいどのちょう）に流れる尾花川もはん濫し餅飯殿（もちいどの）通りの人家約百戸が床下浸水したのをはじめ、今在家町ではガケくずれのため全壊一、半壊二をだすなど奈良市の被害は相当大きかった」（『大和タイムス』昭和28年９月26日付「奈良市でも避難命令！」より）という状況でした。奈良のメインストリートである三条通りは濁流で川のようになり、市内いたるところが水浸しになりました。

雨は午後６時過ぎには小やみになり水も引き始めましたが、市内は停電して、近鉄や国鉄（現JR）も不通となり、電話もつながりにくい状態がしばらく続きました。

■3－2　吉野川のはん濫

県の南部では吉野川増水による被害が甚大でした。同川は25日午後７時の時点で7.5メートルまで増水。７月の紀和水害の時が3.5メートルだったことを考えると、相当の水量だったことが分かります。特に被害が大きかったのが郡内を吉野川が貫流する宇智郡で、全長250メートルの大川橋は橋上１メートルを残して濁流が渦巻く状態となりました。

郡内野原町（現五條市）では下牧地区34戸が一瞬にして３メートルに達する浸水に見舞われ、曲り淵から下流の堤防を越えた濁流と丹生川（にうがわ）のはん濫で、大川

第2516号　大和タイムス　昭和28(1953)年9月26日　土曜日

不安におののいた一日

樹木、トタン吹っ飛ぶ

奈良 暗黒の中 旅館 大もうけ

▽『台風や災害は、来始めると忘れないうちに何回も繰返してやってくる』七月、八月の水害にこりごりした県民に、九月初めの二百十日や二十日が無事通過してホッとする間もなく、その名も『十三号』台風が『金曜日』の前二十五日本県に来襲、県民を不安におののかせた。

▽この日気象台や測候所の予報で午前七時のニュースから台風襲来の予報がラジオで刻々伝えられ、最初午後二時半ごろ和歌山から本県に来襲と伝えられたのが、予定より遅れて同四時すぎから五時にかけて暴風が吉野地方から奈良市周辺部を襲って北進した。

◇……この日記者は午後四時すぎから台風の真っただ中、車をかって市内を回ってみた。まず京終のバス道路にかかって行く。猛烈な雨の吹き降り、きれいに洗われたアスファルト道路には人っ子一人みられぬ。稲や農作物の悲惨にうつ伏せに倒れた姿がいたましい。黄色いトラックが立往生し、掘挑の街に倒れたバスの駅では不通を知らずに待っている人たちの群、パチンコ屋は満員の客で大賑わいだ。米軍キャンプでは雨の中を銃剣を持って立つ衛兵、明るいヘッドライトをつけて突っ走るMPのジープ、走るにつれいろんな看板がフッとんで自動車の行く道を妨げる。

◇……奈良公園では駐車場の高いマツの木をはじめ『四季亭』『江戸三』の前のマツ、スギの木が倒れ、春日奥道は水であふれ、スギの枝葉で道をふさぐ中を、シカが水たまりの上を三匹、五匹ゆうゆうと歩いているのがにくらしいな。学大前の水にあふれた道を通って五時前一たん本社に帰る。

◇……その後さらに台風は吹きまくる。電燈は消え、近鉄はもちろん国鉄も不通、電話もとだえがちと、まるで中世紀の社会に逆戻りだ。暴風雨もようやく収まった午後八時前記者は再び暗黒の街を走り台風一過直後の実情をみた。……

……いた。丁度マイクが『大阪行、九時四十五分発車』を放送、一瞬人人の顔がやわらぐ。同駅から暗い街を本社にもどりローソクの灯で原稿を書いていると、夜十時十五分、五、六時間ぶりで電燈がついた。（D記者）

固く戸を閉す

【高田発】台風十三号が襲来した二十五日、大和高田市の表情は……

"死の宣告だ" …五条町…

【五条発】さる七月十八日の……

和歌山測候所 台風警報解除

宇智吉野地区署の屋根ふっとぶ

悪戦苦闘の観測

42年目の台風と戦う測候所員

台風襲来の二十五日記者は台風気象観測に全精魂を打ちこむ……

修學旅行生足どめくう 旅館は満員

奈良市法蓮町で門の倒れた家

台風で倒れた春日大社境内の石燈ろう

【写真】台風の観測に取組む奈良測候所の人々

被害の様子を伝える当時の新聞（『大和タイムス』昭和9月26日付3面）

町100戸、川原町120戸、中之町45戸、西町５戸が２メートル余りも浸水。「ドロ沼と化した道路にはマキや家具などがポッカリ浮き惨状を物語っている」（『大和タイムス』昭和28年９月28日付「台風13号と戦う人たち」）という状態でした。

同郡五條町（現五條市）では宇智川、西川、東洋川、寿命川などがあふれ、大島地区約300戸、田中地区約200戸、新町付近250戸、川端地区90戸余りが被害に。「大島の百間堤が切れると町の半分がドロ田と化す」（前掲紙）と言われていた地域で、危うくそれは回避できましたが、それでも１～３メートル余りの浸水がありました。東洋川のはん濫では、25日午後４時過ぎに五條中学のグラウンド5,000坪が浸水し25メートルレーンを９つ持つプールも泥水に没しました。同校のポンプ小屋の破片は50メートル以上も離れた電車の線路まで飛び散り、板塀50メートル余り、校舎の屋根瓦なども大破しました。また午後５時ごろには突風で、五條町の宇智吉野地区署の道場が半壊し、刑事室、会計室が使用不能となりました。

宇智郡では、いずれも住民は避難していたので、幸い人的被害は発生しませんでした。しかし、泥水に洗われた人家はとうてい人が住める状態ではなく、道路のいたるところに木片や瓦が散乱した状態になりました。

吉野川が増水することは昔から度々ありましたが、急激に増水しサッと水が引いていくような現象は珍しく、地元の古老も「こんなことは初めてだ」と述懐していました。

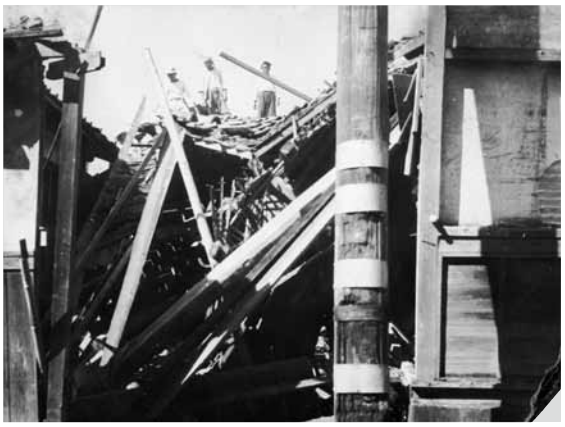
同川筋では中流域の川上村で、午後２時ごろに入之波（しおのは）小学校と校長宅が流出しました。その直前、同所で局所的な大雨の降ったことが記録されており、入之波（しおのは）上流約８キロ先にある通称「かまぼこ谷」で山崩れが起こり土砂ダムを形成。その後の増水でそれが決壊したため洪水が発生したということでした。

■３－３　その他地域の被害状況

熊野川の上流に当たる北山川では、25日午後２時10分の河合測候所から奈良測候所への現地情報第一報によると「近年まれにみる大水！十三時から十四時まで

五條町の市街地（写真提供：奈良新聞社）

五條中学校の被害のようす（写真提供：五條消防署）



宇智吉野警察署倒壊（写真提供：五條消防署）

雨にぬれた布団を屋外に干す五條町民（写真提供：奈良新聞社）

寿命川井堰決壊（写真提供：五條消防署）

の降水量実に七十ミリ。総雨量五百ミリを越している」（『大和タイムス』昭和28年９月26日付「悪戦苦闘の観測　42年目の台風と戦う測候所員」）という状況で、30メートル余りの増水がありかつて浸水したことのない地域まで水浸しになる被害が発生しました。ほか、磯城郡織田（おだ）村（現桜井市）の初瀬川（はつせがわ）で25日午後８時に堤防が20メートルにわたり決壊し、生駒郡斑鳩町で竜田川の堤防が５か所決壊。北葛城郡では葛城川が1.2メートル、南葛城郡では高田川も1.2メートル、宇陀郡の曽爾川は1.8メートル、高市郡の飛鳥川2.1メートルそれぞれ増水し、いたるところで浸水被害や橋梁流出が発生し、被害のなかった市町村は県内に一つも無いという状況でした。

７月に水害を経験した野迫川村も、ようやく復旧した道路が再び壊れ、村内の郵便局や公民館が全壊、田畑のほとんどが流出する被害を受けましたが、直近で災害を受けた教訓と、携帯ラジオを持つ家があったため、台風当日の朝８時ごろには避難して人的被害を最小限に止めることができました。

■３－４　人的被害

浸水被害が大きかったのは奈良市や宇智郡でしたが、人命の奪われる被害が出たのは県北東部の山間部が多く、いずれも山崩れが原因でした。

９月25日（金）午後１時30分ごろ　宇陀郡御杖村

山崩れのため家屋が倒壊。一家４名が生き埋めになった。駆け付けた消防団

月ヶ瀬倒壊家屋（『大和タイムス』9月27日付より）

が救助に当たり、午後３時30分ごろ、母親（36歳）が遺体となって発見され、翌26日午前９時に残る祖母（63歳）長男（15歳）、三男（14歳）の遺体が掘り出された。次男は近所に遊びにいっていたため無事だった。

９月25日（金）午後４時ごろ
添上郡月ヶ瀬村（現奈良市）
山崩れで自宅が全壊して下敷きとなり女性（24歳）が死亡した。

９月25日（金）午後５時10分ごろ　添上郡柳生村（現奈良市）
今川が増水してきたため家財道具を２階に運び上げていたところ、突然大音響がして裏山が崩れ、家が押しつぶされた。女性（30歳）が今川の濁流にのみ込まれ行方不明。一緒に家にいた義妹は右腕を折る大けがをした。女性の８歳と２歳になる子どもは無事だった。

日時不明　添上郡東山村（現奈良市）
山崩れで女性（16歳）と男性（年齢不詳）が死亡した。

９月25日午後２時40分ごろ　吉野郡宗檜（むねひ）村（現五條市西吉野村）
自宅に帰宅中の男性（55歳）が突風にあおられ濁流の桧川追川に転落し、行方不明に。

日時不明　吉野郡川上村
勤め先の材木会社が水浸しになり、川端の材木流出を食い止めようと作業していた男性（19歳）が、足を滑らせ川に転落し濁流にのまれ行方不明になった。吉野郡ではほかに男性（40歳）と女性（41歳）が行方不明となっているが、詳細は伝わっていない。

上記のほかに、29日午後５時に県災害救助隊本部が発表したところによると、北葛城郡でも１名の死亡が確認されているようですが、当時の新聞紙面などでは報道されておらず、詳細は不明となっています。

４．この災害の特徴

当初の予報では大阪湾に進行すると見られていたため、室戸台風と同様の暴風害を警戒していましたが、台風は向きを変え中心が県南部を通過することとなりました。それにより各地で豪雨被害が発生。特に佐保川のはん濫については、「絶対に大丈夫」ということが災害においては通用しないことを示しています。県内の被害総額は100億円を超えると試算され、48市町村に災害救助法が適用されました。

3－4 台風第15号による水害・土砂災害

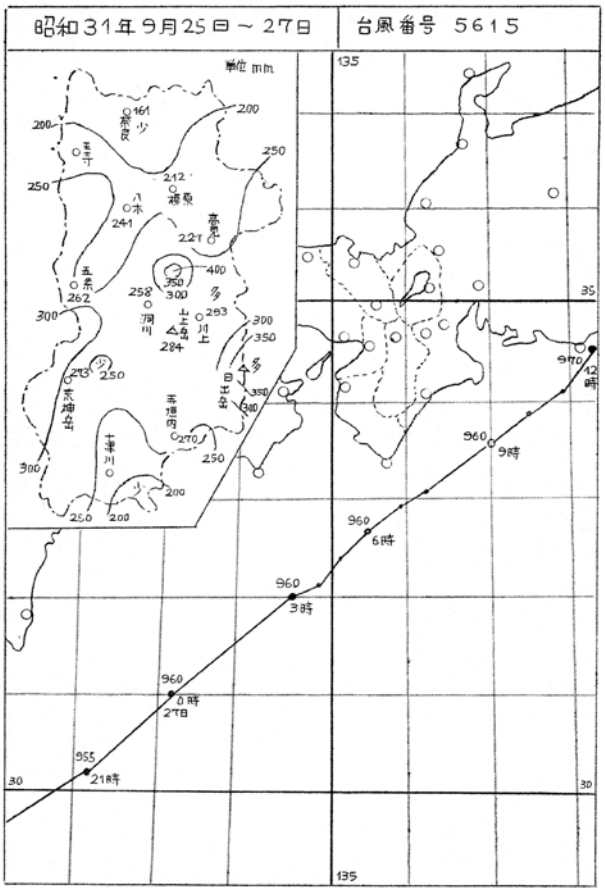
昭和31（1956）年　9月25日～27日

新生田原本町発足３日前に一面を泥海に変えた集中豪雨

近畿地方を寒冷前線が通過した後、台風第15号が紀伊半島をかすめるように進行していき、県北部平坦地を中心に被害が発生しました。町村合併により田原本町が誕生する３日前に同町を襲った浸水被害は桜井市にも及びました。

1．台風の進路

9月22日午後3時、マリアナ諸島の西方沖に発生した台風は北北西に進み、9月25日午前沖縄の南南西250キロメートル付近で北北東に進路を変更しました。沖縄付近を通過する際の勢力は、中心気圧953ヘクトパスカル、最大風速45メートル／秒で最大に。その後、奄美大島を通過して次第に速度も増し、27日午前6時には潮岬南西80キロメートルに達しました。勢力はやや衰え960ヘクトパスカルを示しながら北東方向に進んで紀伊半島沖を通り、正午ごろに御前崎付近を通過し、鹿島灘を経て28日朝には千島東方海上に達しました。



台風の進路と県内降水量分布図
（『奈良県に大被害を与えた主要台風の解説』より）

2．県内の天候の推移

台風が接近する前には近畿地方を寒冷前線が通過していて、奈良でも全域で相当量の雨が降っていました。そこに追い打ちをかけるように台風による雨が降り、25日夜から27日午前中にかけて大雨になりました。県内各地における25日の降り始めからの雨量は、次ページの表の通りです。

期間9月25日～27日		
地　点	総降水量（㎜）	日最大降水量（㎜）
八　木	241.1	162.5
大宇陀	263.8	188.9
五　條	199	130
山上岳	294	250
河　合	291.7	246.9
荒神岳	272.5	199.8
玉置山	182.6	150.1
日出岳	375	328

主な地点の降水量（『奈良の台風40年』より）

奈良測候所は26日午前７時に大雨注意報を発表。次いで午前11時には洪水注意報を出しました。県内の各河川では警戒水位を突破する状況で、県水防本部は26日午前10時全県内に水防指令第一号を発表し、河川の増水、堤防の決壊に警戒するよう指示を出しました。県警本部では万一に備え２個分隊22名、通信所職員20名、警ら交通隊23名の計65名態勢で台風に備えました。

参考に、奈良地方気象台で９月25日から27日までの間に観測された極値を挙げると（カッコ内は観測時刻）、総降水量161.1ミリ、日最大降水量108.6ミリ（26日）、１時間最大降水量18.1ミリ（26日午前８時20分）、最大風速12.2メートル／秒（27日午前７時10分）、最大瞬間風速16.2メートル／秒（27日午前６時57分）で、最低気圧は993.7ヘクトパスカル（27日午前７時45分）でした。大雨を降らせた後、台風自体が最接近したことが分かります。

雨は27日正午ごろまで降り続き、台風が去った後は大雨がうそのように澄み切った秋空が広がりました。

３．被害のようす

高所に避難する御所町の住民（写真提供：奈良新聞社）

降り続く雨で26日正午には竜田川、寺川、葛下川（かつげがわ）が警戒水位を突破し、さらに夕方までに大和川、曽我川も警戒水位に達しました。

奈良市内では、大和川水系となる各河川が増水しましたが水防団員が土のうを積むなどして対処したため大規模な決壊は免れました。しかし、それでも市内で床下浸水があり、道路の決壊や住宅地でのがけ崩れが発生しました。生駒郡では、大和川増水のため26日の夜に三郷村（現三郷町）の住民が避難する騒ぎとなりました。

天理市の初瀬川（はつせがわ）は27日午前10時にあふれ出しましたが、消防団や地元民が協力して土のうなどを積んで決壊を防ぎ、水田が冠水する被害にとどめました。その一方で、宇陀川流域では宇陀郡榛原町（現宇陀市）で堤防が決壊し床上床下浸水の被害が出ました。南葛城郡御所町（現御所市）の柳田川は27日午前７時ごろに堤防が決壊して床上、床下浸水の被害が出て、町全体が泥水に洗われたような状況でしたが、住民は避難していたため人的被害は免れました。ほかに高市郡では飛鳥川が増水し明日香村では家屋の倒壊・流失がありました。

県南部では、吉野川が増水し五條町で浸水被害が出たほか、大淀町や川上村で民家が流出し橋も流されました。西吉野村（現五條市西吉野町）ではがけ崩れが続出し孤立状態になるなど、浸水被害に加え土砂崩れの発生も見られました。大

台風一過後の各地の様子を伝える新聞（『大和タイムス』昭和31年9月28日付）

塔村（現五條市大塔町）に完成した猿谷ダムは、ちょうど雨の降り出す前日24日から貯水が開始され、本来なら満水まで５、６日はかかると言われていたところ、台風の雨のためたった３日で満水状態になりました。

■３－１　中和地域の河川は軒並みはん濫

この台風で特に被害が大きかったのは桜井市から磯城郡周辺にかけてでした。桜井市では27日午前６時30分からサイレンを鳴らして警告を発し、水防団が寺川や栗原川の補強を行ったものの、あえなく決壊。浸水被害400戸、橋梁流失14、道路決壊22か所の被害が出て、山崩れで民家が倒壊し２名が亡くなる事故も発生しました。事態を受けて桜井市会は翌28日午前９時に協議会を開き自衛隊の出動要請も行いました。また、隣接する磯城郡大三輪町（現桜井市）では大和川と纏向川（まきむくがわ）の堤防が決壊し、民家が浸水するなど河川のはん濫が甚大な被害をもたらしました。

家屋に迫る濁流（写真提供：奈良新聞社）

一面が水没した田原本町付近（写真提供：奈良新聞社）

川東村の根太口で往来が水漬しに（写真提供:奈良新聞社）

流失した寺川橋（写真提供：奈良新聞社）

その大三輪町では初瀬川の堤防も27日午前10時５分に決壊し、「下方の川東村笠形、大安寺、南阪手、北阪手（いずれも現田原本町）方面を一瞬にして泥海と化した」（『大和タイムス』昭和31年９月28日付「稲田も一瞬泥海　川東村南部」）という状況でした。濁流は刻々と民家の床上に押し寄せてきて、住民は家具等の運搬などで右往左往しました。水は正午過ぎにはひさし近くにまで達し、逃げ遅れた住民は２階に上がったり屋根に登ったりして危うく難を逃れ救援を待ちました。

同郡内を流れる大和川水系の寺川では27日の朝から急激に増水。多村に架かる寺川橋には流木が引っ掛かりはん濫寸前と危険な状態になったため、住民総出で欄干の切り取り作業と、堤防の越水を防ぐための補強工事を行いました。決壊は免れましたが、橋は午前10時ごろに流失してしまいました。

３－２　人的被害

各地で河川のはん濫による浸水被害が多発しましたが、幸いにそこでは甚大な人的被害は出ませんでした。水の事故としては、川でおぼれた男性とそれを助けようとした10代の青年が２人とも行方不明になるという事例がありました。また、桜井市では土砂崩れによる死亡事故が２件発生していますが、いずれも雨が降り続いた翌朝のほぼ同時刻に自宅で起っています。

９月26日（水）午前１１時30分ごろ　磯城郡川西村（現磯城郡川西町）

曽我川と葛城川の合流地点で漁をしていた男性（54歳）が川に転落。上流から木片につかまり「助けてくれ」と叫びながら流れてきた男性を救助しよ

うとして、魚捕りをしていた男性（19歳）がみのと靴を脱いで服のまま飛び込んだ。それを見ていた人が２人を助けようと竹ザオを取りに付近の家に飛び込んだが、戻ってみると２人の姿はなかった。流れてきた男性は増水して急になった流れに網が引き込まれて、誤って川に落ちたものと見られている。

9月27日（木）午前８時ごろ　桜井市北山

土砂で自宅が押しつぶされ、家の下敷きになり男性（89歳）が圧死した。一緒にいた義娘（55歳）は、かまどの陰に逃げたため助かった。

9月27日（木）午前８時10分ごろ　桜井市竜谷

家族に「裏に出ては危ない」と告げ、自宅家の裏にある納屋のようすを見に行った女性（44歳）が土砂崩れに遭い圧死した。

■３－３　救援

台風が去った後は、浸水家屋の泥出しや水に漬かった家具などを秋空の下で干す姿が各地で見られました。特に被害が大きかった田原本や桜井には、日本赤十字社奈良県支部から伝染病発生予防のため、医師１名と救護班が派遣されました。40軒のうち４、５軒を残し井戸が汚染されてしまった川東村笠形（現田原本町）では、村民同士で飲料水を分け合って炊事するような状況でしたが、28日朝から同村消防団がポンプで排水作業を行いました。桜井市では28日午前９時30分より市会全体協議会を開き復旧対策を協議する一方で、作業員を雇い早朝から家屋の清掃を実施したほか、防疫班を出動させ、床下や下水への石灰散布、消毒のため井戸水にカルキの投入などを行いました。また同市では被災者に被害の程度に応じて救助金や見舞い金、供養料が支給されました。

家財道具を乾かす川東村の住民（写真提供：奈良新聞社）

４．この災害の特徴

過去の甚大な被害をもたらした台風と比較して、昭和31年の台風第15号は、決して大水害を引き起こすほどの規模ではありませんでした。それが結果的に大雨をもたらした原因は、台風襲来前の25日から停滞していた秋雨前線にあり、そこに27日の朝に台風が運んできた湿気を含んだ暖かい空気が入り込んだことで、３時間に60ミリという大雨を降らせ、危険水位まで増水していた河川が一気にあふれたという結果になりました。